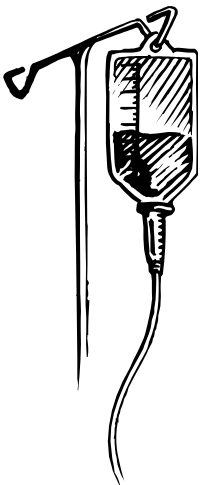


山田 太郎

# 「入院顛末記」

数年前、初めて入院を経験しました。そのときのドタバタをまとめてみましたので、まだ入院したことない方は、ぜひどうぞ。



内容

は、は、腹が痛い！	三
急性膵炎でした	四
いやいや、それにしても痛かった	五
入院生活	六
そして退院	一〇

## は、は、腹が痛い！

2001年2月18日、日曜の早朝。なんだか、腹がシクシクというかキューというか、とにかくそんな感じになって、手で押さえ、背中を丸めてないと痛くてたまらない状態になった。日曜だから医者もやってないし困ったなあと思いつつも、この痛さはハンパじゃないと感じたので、朝6時頃、ぐっすり寝ていた家内に「腹痛いので〇〇病院行く」とだけ告げ、クルマで近くの救急病院に駆け込んだ（今、思うと、よく運転したなあと感心）。

「当直の若い医者に、「とりあえず点滴しましょう」と言われ、言われるままに点滴。ところが、いくら点滴しても痛みは治まらず、むしろ激しくなってきた、昼近くになって吐き気までしてきて、ゲーゲー状態に陥る。病院側も「これは変だ」と感じ始めたのか、CTを撮りましょう。そのころには、腹を押さえ、背中を丸めてソロソロとしか歩けない状態。CTルームまで行くのも一苦労。ちやうど、家内も子供を連れて病院に駆けつけた。

CT撮ったあとは、「入院しましょう」と言われ、「ああ、そうですか」と言うしかなく、「で、いったいなんなんですか？」と医者に聞いたなら、「腸炎らしい」とのこと。もはやこの時点では自分の足で歩くこともできず、車椅子で病室まで運ばれる。で、病室のベッドに横になり、家内に「参ったなあ。とりあえず入院の手続きを……」と話してたら医者が

やってきて、「救急車呼びますから、埼玉医大に行ってください」。

ボク…えっ、なんで。なに。なんなんですか。

医者…CTの結果を見たんだけど、どうもおかしい。小腸にガスの塊があるんだけど、一カ所にこんなに固まっているのはおかしい。普通じゃない。お腹を切ってみないと詳しいことは分からないかもしれないから……

ボク…えっ、腹、切る、んですか……マジ、切るのは？

医者……。とにかく救急車呼ぶので、埼玉医大に行ってください。

てなわけで、要するに、ウチではよく分からないから大学病院に行きなさい、ということらしい。それからまもなく（10分くらいかな）、ピーポーピーポーという音が……「あれがボクのためにやってきた救急車か、ワクワク」なんて思ったかったけれど、実際にはそんな余裕のないボクはストレッチャーという細長い簡易ベッドみたいなのに乗せられ、御輿のようにかつがれて救急車の中へ消えていったのであります。

### 急性膵炎でした

救急車の中ではただ横になってただけ。目の前には、よく分からない計器類。救急隊員が「交差点曲がりまーす」とか「道を空けてください」とか叫んでたから、道はけっこう混んでたみたい。クルマを運転してるとき、救急車がき

たら道を空けるようにはしてたけど、まさか自分が、道を空けてもらう側になるとは思わなかった。

病院に着いてからは、なんだかよく覚えていない。もはや一人で歩ける状態ではなかったので、ベッドに乗ったままアチコチ動いたり、車椅子に乗ってレントゲン撮ったりした記憶はある。そういえば、救急車を出て担ぎ込まれた部屋は医者や看護婦、患者達だと思うけど、いろんな人がいて、騒然とした雰囲気だった。ボクは、ストレッチャーに乗ったままズボンを脱がされ、足の付け根の血管から採血されたのを覚えている。若い医者が、「お酒はどれくらい飲む？」と聞くので、「寝る前に3〜4合くらい」と答えたような気がするけれど、はっきりとは覚えていない。

ともかく、最終的には病室らしきところへ運ばれて、腕には点滴を2〜3本。そんなもって、胃の液体を外へ出すチューブを鼻から胃へ通されて（通すとき、これがまた痛い）、見事に急病人らしい格好でベッドに横たわったボクは、それから、まるまる2日間、腹の痛みと格闘することとなった。なお、点滴をされたときには、最初の採血の結果からアルコール性の急性膵炎すいえんということがほぼ分かったのでした。

### いやいや、それにしても痛かった

痛くて痛くて、身体を動かせない。とれる体勢は、横向きに寝てエビのように腰を曲げてるカタチだけ。とても身

体をまっすぐには伸ばせない。上向きに寝ることもできない。だけど、片方だけ向いてると身体の片側が痛くなるから、ある程度時間がたつと、身体を回転させて反対向きになるんだけど、それがまた痛くて痛くて、反対向きになるのに15分くらいかかったような気がする。

もちろん腹の痛みは相変わらずで、こちらとしては、病院に入ったんだから、とりあえず痛みだけでもなんとかしてほしいと思ったし、そう訴えもしたんだけど、基本的な治療は、絶飲絶食に膣<sup>すい</sup>炎<sup>えん</sup>の薬を点滴で入れること。かなり強い鎮痛剤も打ってもらって、その結果、眠くはなるんだけど、腹の痛みが消えるわけではない。鎮痛剤が切れて目が覚めると、依然として腹の痛みは続いていて、あんまり痛いんで、この痛みが消えるなら、腹を切ってもいいときえ思った。また、右向きのエビの格好から、左向きのエビの格好に「ウー」とか「あつ、てててて」とか「くっそー」とか唸りながら身体を回転させる作業を一人繰り返し続けた。まるまる2日間、こんな状態が続いたのでした。

## 入院生活

入院してから3日目くらいから、痛みは少しずつ引いていった。医者には「治療の効果が上がっている」と説明を受ける。確かに、痛みが引いて、今度は鼻から胃に入っているチューブが気になり始める。鼻の穴から食道を通り、胃に届いているこのチューブは胃が分泌する液体を外に出す

## 入院顛末記

ことで、脾臓を含めた胃から下にある臓器を刺激するのを防いでいるらしいのだが、それしても、鬱陶ウツウしいのなんのつて。点滴はまだ我慢できて、この鼻チューブだけは、なんとか早くとりたいと思った。けつきよく入院期間は3週間だったのだけれど、最初の1週間は何も食べられないし、飲めない状態が続く。水分と栄養は点滴からのみ。なお、痛みが引いてからは、8人部屋の一般病棟に移った。

身体から最初にとれたチューブは、鼻から胃に入ってるやつ。これがとれると気分はずっと楽になる（夜、寝るときも鼻に入ってたんですよ）。そして、入院2週間目から流動食が始まる。流動食というのは、お粥の上澄み液、みそ汁の上澄み液、そして薄味のコンソメスープみたいな液体でも、まあ、ほぼ10日ぶりの食事だから、なかなか感動的ではありました。でも、飲んだらすぐに腹がゴロゴロ鳴り出して、トイレに駆け込む。ただし、トイレに駆け込んだのは最初の一回だけで、以降は順調に食事できるようになった。流動食から三分粥、五分粥とステップアップして3週目には、普通のお米を食べていた。そういえば、病院食ってまずい印象があるだろうけど、まずくて食えないということはありませんでした。確か、1食あたり百円ちよつとの予算だと思ったけど、それにしてもよくがんばってる印象。一度、マグロの刺身が出たことがあったんだけど、そのときは「へー」と思った。まあ、病院によっても違うんだろうけど。

## 入院顛末記

ボクが入院したのは外科病棟。主治医の回診は朝、昼、晩とほぼ3回。大病院らしく、主治医を筆頭に何人かでグループを作り、順番にベッドを巡回していく。若い医師の教育も兼ねているんだろうけど、それは大病院の常でしょう。まわりのベッドには、胆石の患者さんが多かったです。みたいで、みんなこれから腹を切るか、すでに切って、その快復を待っている年輩の人たち。幸いボクは腹は切らなかった。病室内では比較的元気な部類だったと思う。ただ、主治医には何度も「井上さん、ラッキーだったね」「数年前なら分からなかったよ」と言われた。病状の程度は、軽度、中度、重度で言えば、中度と重度のあいだくらいだったそう。で、けっこうやばかったらしい。後でインターネットで調べたら、急性膵炎は、膵臓きゅうせいすいえんが出す酵素が膵臓自身を溶かす病気で、それで膵臓が炎症を起こし、それが他の臓器に影響して、重くなると多臓器不全を起こしているんだ。というわけで、痛みが治まって、食事もできるよ。うになり、腹も切らないですんだのは、かなりラッキーなことであつたらしい。

食事でも普通にできるようになり、栄養と水分補給の点滴もとれた。2週間目以降は、自覚症状もなくなって、かなり退屈を感じ始めた。朝は6時に起こされて、あとはときどき検査と投薬がある程度で、テレビを見て、朝昼晩と3食を食べて、9時には就寝という規則正しい生活。考えてみ

## 入院顛末記

れば、毎朝、こんなに早く起きることなんてないし、いつも朝飯は食べなかったのに、とりあえず出てくるものは食べてました。もちろん、パソコンなんてないし、インターネットにも触れようがなくて、「あー、ホームページどうなってるかなあ」「BBSに質問きてるかなあ」とか思ったけど、考えたってどうしようもないし、いったんPCやネットから離れてみると、すっきりするというか、ある種の爽快感みたいなものは感じたりもした。そもそも、病院の中って、少なくとも患者にとってはインターネットは無縁の世界でしかないものね。まあ、仮にベッド脇に端末があつて、Yahoo!とかで「急性腭炎」すいえんで情報を検索できたら便利かなあと思ったりもしたが、そんなことになったら、医者はやりにくくつてしょうがないだろうなあ。

そんなこんなで、ボクの身体は順調に快復へと向かっていったのです。それにしても同室の患者さん方には、いろいろと声をかけてもらつて、勇気づけられた。ボクが入院したのが2月18日だったのだけれど、病院で年を越した人もいれば、病院で花見かなあという人もいて、そんな人に声かけられると、ボクが入院してるのが申し訳ない気分にもなっ

たりした。病気になる人と人は優しい気持ちになるといいますが、その感じはなんとなく分かるような気がする。わずかな時間、同じ空間を共有したただけだが、どの人も、早くよくなってほしいと、そう思います。

## そして退院

喉元過ぎれば……とはよく言ったもので、3週間の入院期間のうち、最も記憶に残っているのは、やはり最初の数日間の痛み。痛みが引いたあとは、腹を切ったわけでもなく、鼻チューブや点滴のつらさはあったものの薄い印象しか残っていないのは、我ながら現金なものだと思う。で、無事退院となったわけだが、じつは最後の1週間は、子供が40度近い熱を出して、場合によっては入院か、という事態になってた。といっても、ボクにはどうしようもなく、幸い入院にはいたらなかったが、その後、家内が疲れから風邪を引いて寝込んだりと、まあ、ボクの退院の前後はそんな状況で、仕方ないから、一人で手続きして、荷物をまとめてタクシーを拾って帰ることに……。義理の兄が迎えに来てくれて、なんとか一人寂しく退院する事態は避けられたけれど、退院後、家族3人がもとの生活のペースを取り戻すには、しばらく時間がかかったのです。

その後、外来で診察を受けたが、特に異常はなかった。薬はしばらく飲み続ける必要があるようだが、それ以外はいたって健康。アルコールが厳禁なのはつらいけれど、今のところ、命かけてまで飲む必要性は感じてないし、あの腹の痛さを思えば、仕方ないだろうとあきらめてる。昨年の夏、思い立ってタバコもやめてるので、酒もタバコもやらない健全なフリーランスライターの一丁上がりというわ

## 入院顛末記

けだ。もともと、世の禁煙ブームとか健康ブームには嫌なものを感じてたから、「それでいいのかあ」という内なる声も聞こえてくるが、「別に健康になりたくてなるわけじゃないしい」と反応しそうになるところを見ると、「健康」とか「禁煙」とかの言葉にどこかで嫌悪感を持っている自分はまだ残っているらしく、それはそれでたいへん健全なことだと、少しは安心している今日この頃でした。

みなさんも、飲み過ぎにはご注意を。